

M E T R O + マッシモ・ボットウーラ

「レフェットリオ・ガストロモティバ」

設計＝METRO+マッシモ・ボットウーラ

簡素さの知的で高尚な使い方は、
最高のシェフと最も優秀な建築家も結びつける

フランチェスコ・ダルコ

参照 | 本誌pp.3-12

世界では毎年13億トンの食糧が廃棄されている。しかし世界の8億人以上が栄養失調に陥っている。このぞつとする事実から、マッシモ・ボットウーラが推進する「フード・フォー・ソウル」プロジェクトが始まった。第一歩はレフェットリオ・アンブロジアーノの開設である。これは放棄されていたミラノの劇場を貧困層向けの食堂に改変したもので、2015年のミラノ万国博覧会から出た廃棄食品が再利用された。この実践はすでによく知られるようになったが、「フード・フォー・ソウル」が着手したプロジェクトはほかにもある。2016年に実現されたレフェットリオは、リオデジャネイロ五輪の開催中に選手村から廃棄された食料をリサイクルするレストランである。リオでも非常に活気があり人出の多いラバ地区にある施設は、2ヶ月もかからずに完成した。ボットウーラが構想したこのプロジェクトの要件と精神を、METRO事務所以上にうまく解釈できる建築事務所を想像するのは難しい。マーティン・コロン、グスターヴォ・chedrone、エレナ・カバリエロ、マリナ・ヨシイ、アマンダ・アミチス、ガブリエラ・サンタナ、ジョアン・キナス、ルイス・タバレス、マヌエラ・ポルト、ラファエル・デ・ソウサが、ボットウーラと仕事をした建築家である。全員がMETROのメンバーだ。METROは2000年に設立されたサンパウロの建築設計事務所で、パウロ・メンデス・ダ・ローシャという数少ない偉大な現代建築家の一人と何度も協働してきた。METROはその教えを吸収し、現在世界で活躍する最も堅実で最も活気のある建築家集団のひとつとして異彩を放っている。

「フード・フォー・ソウル」が用意するのは、食べるものに事欠く人々に向けて食事を提供する空間だけではない。ミラノに設置された厨房では、国際的に活躍する著名なシェフの何人かが働いただけでなく、有名なアーティストやデザイナーたちが内装に貢献した。リオデジャネイロの場合、METROは放棄されていた50m×8mの土地に、一般的に使われている素材を用いて建物を実現させ、

隣の広場も活気を取り戻した。ポリカーボネート製の被膜で鉄骨構造が包まれている。広場に面した側では、柱によって半透明パネルが支えられ、屋外に向けて大きく開口する。反対側は、敷地を囲む既存の建物の壁体に鉄骨梁が差し込まれた。1階の中央に置かれた厨房の片側にテーブル席、反対側に小さな木造階段が挿入され、この空間では多様な用途が可能なことを強調する。素材は非常に合理的で簡素に使われているが、車道に面したファサードに動きを与えるわずかに突出した矩形の要素からも直觀されるように、素朴で無邪気な使い方とは無縁である。構造、外被、調度、厨房のデザインに気まぐれな改変は見当たらず、全体として、本質を追求することによって美学的な面でもいかなる利点が得られるかが明示される。ところで、本質の高尚で知的な使い方は、METROが実現した良質な作品の特質であり、パウロ・メンデス・ダ・ローシャの実作が決して凡庸さに墮すことがないのと同じだ。凡庸さとは、本質性が手段ではなく崇拜対象になった時に生じる不可避の結果を表す。だが他方で、本質性の知的で高尚な使い方こそ、「フード・フォー・ソウル」プロジェクトの屋台骨をなすと思われるのだ。

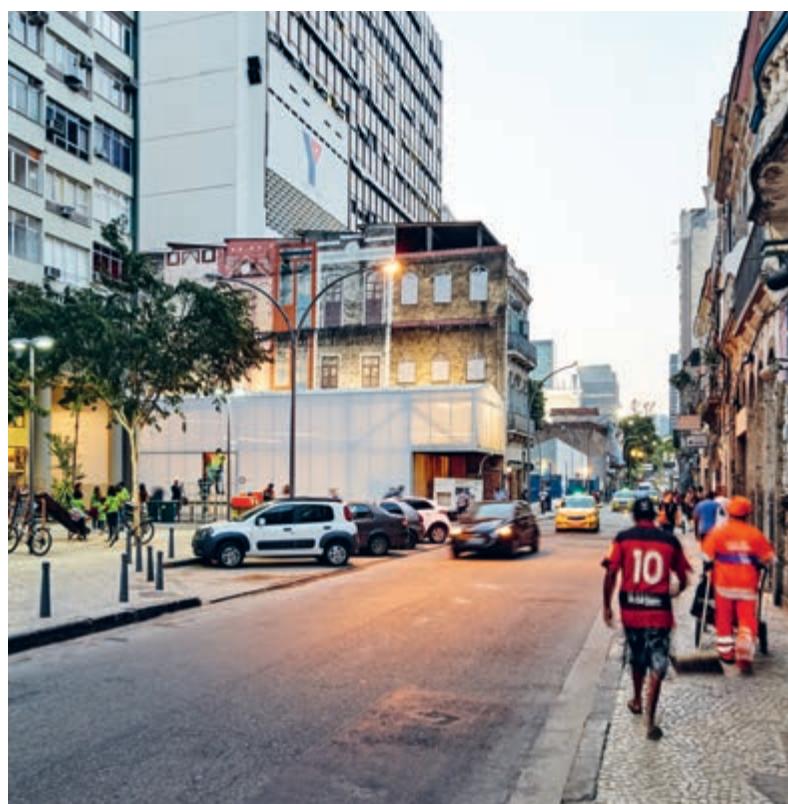
尊厳を取り戻すこと マッシモ・ボットウーラ

参照 | 本誌pp.6-7

人を大切に扱うように、食品を大切に扱う。これが料理人の絶対的な使命である。私にとって、成功と評価、挑戦と過酷な仕事の年月に得たものをすべて還元する時が来た。同じくシェフたちも自分の厨房から外に出て、共同体の役に立つべきではないか。共同体の要求に耳を傾け、腕まくりして働くべきではないか。またシェフたちと同じく、誰もが自覚的にならねばならない。何についてか？

現在、約8億の人々が飢えに苦しむか栄養失調の状態にあるという事実に、である。またこの同じわれわれが生きる世界で、食料総生産量の3分の1がスーパー・マーケット、レストラン、各家庭からゴミ箱に直行しているという事実に。シェフの使命は味覚と嗜好を満足させることを越えた地点に向かわねばならない。われわれには材料を大切にし、地球とわれわれの共同体に配慮する道徳的義務がある。

このため、私は妻ララとともにNGO団体「フード・フォー・ソウル」——魂のための食糧——の設立を決意した。



街路より見る



厨房



厨房後方の階段

教会を解釈する2つの方法

「プラヤ・グラナダの教会」設計=エリサ・バレロ・ラモス

本質に向かって ジョヴァンナ・クレスピ

参照 | 本誌pp.14-23

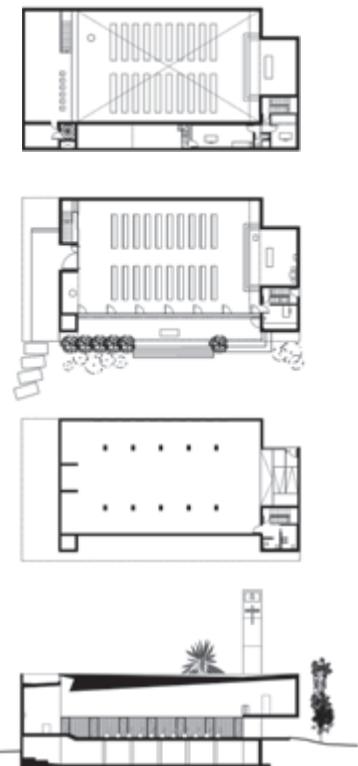
朝の7時から夜の8時まで、連続して撮られた12枚の写真は、チリのサンティアゴにあるサンティシマ・トリニダード・デ・ラス・コンデス教会内部の光の変化を克明に記録する。この教会は建築家マルティン・コレアとガブリエル・ガルダが1960年代に実現した作品である。この連続写真は、同じ位置から祭壇のアプシスの隅を捉えたものだ。傾きをつけた3枚の平面を組み合わせて作られた祭壇の輪郭に沿って、光が射しこみ、礼拝ホールを浸していく。この視覚的な進行によって、手で触れられないが無視できない、鮮やかに刷新し続けるある素材の美しさと移ろいやすさを愛でることができる。

この雄弁なイメージとともに、エリサ・バレロ・ラモスは『建築における光。触れられない素材』(RIBA出版、2015[スペイン語原書(2004)の加筆修正版])を語りだす。図版の少し前に、『創世記』の有名な一文が載っている。「はじめに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の靈が水の面を動いていた。神は言わされた。『光あれ』。こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた」。

カトリック信者であり、建築家修行を通してラテンアメリカのモダニティを体現する人々とつながり、地理的理由以外にもアンダルシアの建築文化の後継者となったエリサ・バレロ・ラモスは、彼女の作品において常に光がまとう役割と、その慎重で成熟した活用の必要が果たす役割を明らかにした。「光はそれ自体であることを止めずに変化する。恒常に変化に身を晒しながら」。自身の仕事においてこの抗い難い条件を自覚する姿勢は、必要なエコノミーに翻案され、各素材独自の表現力を引き出すとともに、その時に使える資金と資源をコントロールする必



南西(エントランス側)より見る



各階平面図/断面図

要を結び付けられる建築に翻案される。

長い間、教育施設——学校、保育園、大学——の実現のほか、展示空間や労働の場の実現に彼女が奔走していたのを見てきた。本誌は、彼女の設計事務所(780号、2009)をはじめコンスタントに記録してきた。それから何年も経つ、エリサ・バレロはモトリルのヌエストラ・セニヨーラ・デル・カルメン教区から、彼女にとって初となる教会建設の依頼を受けた。信仰の場は聖女ジョゼッピーナ・バキタ(1869-1947)に献じられている。聖女バキタは「愛徳の娘」会(カノサ修道女会)に属し、イタリアと密接な関係のあるスーダン出身の黒人の修道女である。2000年にローマ教皇ヨハネ・パウロ2世によって列聖された。

教会の建設地はプラヤ・グラナダにある。マラガとアル

メリアの中間に位置する、シエラ・ネバダ南方のモトリル市の南部地域である。この場所は、スペインとモロッコを含む地中海最西端のアルボラン海に面している。

棕櫚の若木が点々と並ぶ敷地はわずかに傾斜した地形のため、設計案では北側に基壇ヴォリュームに直結するアクセスを置くことができた。基壇は半地下のクリプタとなっている。南側には教会へのアクセス路が設けられ、短い階段で庭から典礼空間そのものの高さに行ける。建築本体の平面構成と空間配置は明瞭で直観的に理解できる。簡素な幾何学による無味乾燥なヴォリュームに、建物の宗教的用途を決定する役割が委ねられている。鐘塔および外壁に沿って正確に配置された開口部に、教会としての特徴と象徴的な要素が認められる。

光はこの計画の選ばれた素材をなす。光の抽象的かつ本質的な使用を通して、エリサ・バレロは聖三位一体の概念を強調する。ざらざらしたマッスに3つの通路を切り抜き、そこから入る光を信仰のためのホールに導く。1つめは分厚い屋根を開けられたトップライトで、太陽が昇る東を向いている。信徒が集う身廊と内陣の間を横断するように配置され、間接的な光で祭壇を照らす。夜のまばゆい光は、合唱隊席にあたる西側の開口部の割れ目



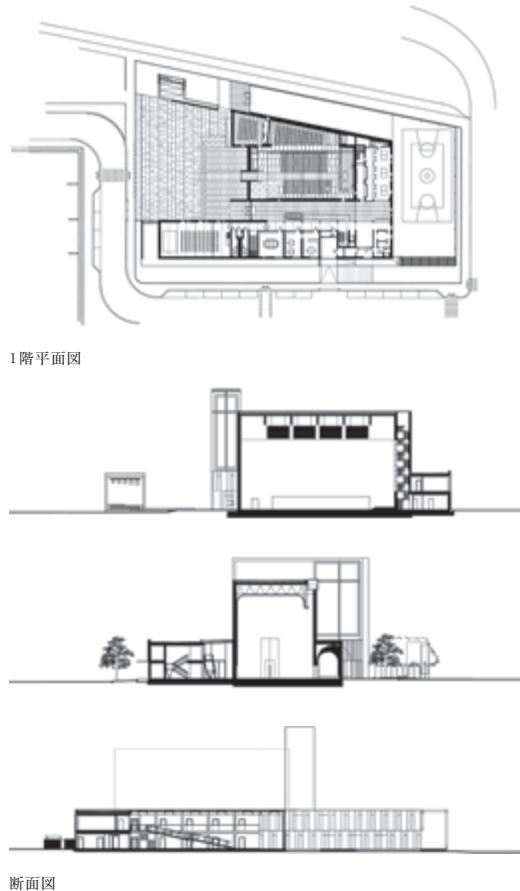
サンティシマ・トリニダード・デ・ラス・コンデス教会の祭壇:
1日の光の変化を示す連続写真



空からの全景

無断での本書の一部または全体の複写・複製・転載を禁じます。
copyright© 2007-2017 Arnoldo Mondadori Editore
copyright© 2007-2017 Architects studio Japan

3つの住宅



1階平面図

断面図

でに指摘したように、このポルターユは平日用礼拝堂がある背の低いほうのヴォリュームも縁取っている。設計競技案を構想する際にボドレッカが想像したものと異なり、礼拝堂には、教会に隣接するヴォリュームに使われたのとまったく同じパネル仕上げが採用された。

こうして教会の白いファサードがヴォリューム全体から他を圧倒するように浮かび上がり、設備が置かれたヴォリューム——教会前広場の片側に沿って、本堂の接地面の輪郭からはみ出して長く伸びる——の外被を構成するパネルの色付けから生じた、色彩の不協和音によつても強められる。

作品:ベンテコステ教区センター

設計:ボリス・ボドレッカ/ボリス・ボドレッカ・アーキテクツ、

Studio di Architettura Marco Castelletti

構造:Sajni e Zambetti srl | 設備:Azeta srl

施工:Colombo Costruzioni spa

規模:敷地面積 5,000 m² / 建築面積 1,800 m² /

延床面積 2,600 m² / 総容積 18,000 m³

スケジュール:設計競技 2001年/着工 2014年7月/

竣工 2016年8月 | 所在地:Via Perini 27, 20157 Milano, Italy

「イブレオ高山の家」設計=モラーナ+ラオ

風景を住まう マッシモ・フェッラーリ

参照 | 本誌 pp.34-37

シチリアの若手建築家、アンドレア・モラーナとルアナ・ラオが第一義的に明確な争点として全力で取り組んだ設計テーマは、風景である。本稿ではその成果を取り上げる。

彼らの仕事が呼び出すのは、建設の営為を取り巻くあらゆる事柄との正確な、あるいは理想的な関係を打ち立てる建築の能力である——すなわち場を占有する力であり、今回の場合はシチリアという、強烈な個性とよく知られた伝統の土地を占拠する力を意味する。さらに、より広域的な建設計画の一部であることを自覚しながら仕事をする力があり、建築家たちは好き勝手に支配できる空白として土地を捉えるのではなく、文化が蓄積された空間として捉えている。だが、個々の建築が環境との間に作り出す関係の度合いは、場を形成するさまざまな事実の歴史的証拠と単に接合すれば表現できるようなものではない。「ある環境に参入する」とは、選択的かつ批評的に場の特徴を把握できるだけの正しい距離を割り出す

ことを意味する。それはモラーナ+ラオが行ったのと別の地平で、シチリアの風景を巡る多様な文学論が証明するところだ。ジョヴァンニ・ヴェルガ[1840-1922:『カヴァレリア・ルスティカーナ』の著者]からトマージ・ダ・ランペドゥーサ[1896-1957:代表作『山猫』]まで、実際に多くの作家にとって、「帰郷」体験は、色彩と味覚、音と香りを感じることで喚起される視覚イメージの共感覚的再発見と一致するのだ。

モラーナとラオが設計したシチリアの住宅は、立地環境の改変をすべて拒む姿勢を隠さない——農村部の名もない自然発生的建物の特徴との同一化においても、都市の随所にバロック趣味が溢れるノートの建築的特質に似せることによっても。この距離のとり方は、形態的な結果が厳格なミニマリズムのものとなるデザイン上の選択に現れている。住宅は、名もなき人々の長年の労働によって平坦になった土地の岩の上に載る。家の抑制されたヴォリュームは、渓谷の方角に向いた農地の、視線を海まで導く眺めによって描かれた水平線の上に立ちあがる。全体としてこれは一軒の住居と風景を眺める機器であり、安全な避難場所を提供する無駄のない機械であるが、光学カメラと捉えることができる。建築家たちは自分たちの作品が建つ場の価値を把握するため、このカメラを



全景



1階平面図



左にリビング、右に中庭を見る

屋外に向かうと考えた。それが、住宅が建つ丘の麓に広がる、イブレアの農村地帯のパノラマである。白く、プラスター仕上げの、矩形の幾何学的フォルムを帯び、近隣のあらゆる建物を特徴づける唯一の建築的要素たる石壁から距離をとった建物。その冷たい造形と裏腹に、平面構成は中心性の感覚を内包する。それはどの古い住宅にも見いだせる特質である。

実際に、屋根で守られ外界から隠された中庭から、光や風とともに出入り口、ファサード、全体像と順に遠心的視界が開けていく。この家は伝統に従って、ひんやりしたパティオを中心に構成された。一方、あらゆる形態的表現は、屋内と屋外を連結する明り採り、くぼみ、余白といった、ボリュームに挿入されたヴォイドと符合する。中央のスペースに溢れる光はリビングと個室を照らし、寝室で消滅する。このように、全体を組織立てる中庭に密接に依拠した住居となっている。

こうした空間構成は非慣習的な暮らし方をもたらし、親密さや快適さの価値に予期せぬ意味を与える。確かにこの家は劇場に似ていて、その限られた舞台の上で日

常生活が演じられるのに対して、背景には並外れて拡張された光景が広がる。それが、ノートを形づくるあの得も言わぬ舞台袖の連続の、周りを囲む農村地帯がもたらす風景なのだ。

作品:イブレオ高山の家

設計:アンドレア・モラーナ+ルアナ・ラオ

構造:Antonio Di Benedetto

施工:Angelico Costruzioni srl

スケジュール:敷地面積 19,000m²/建築面積 157m²

スケジュール:設計 2014-15年/施工 2015-16年

所在地:Noto (SR), Italy

【モラーナ+ラオ】

アンドレア・モラーナヒルアナ・ラオは、シラクサ大学建築学部で学び、2009年に卒業。オルティージャの旧アベラ兵舎の再生に関する卒業制作を共同で行い、主査のブルーノ・メッシーナから称賛された。在学中にポルトガル、アルゼンチン、イタリアで多数の国際的ワークショップに参加。設計競技の協働者として多くの評価や賞を受ける。2007年にモンテッロ都市再開発の学生向け国際設計競技で第3位入賞。翌年、在学中に「M邸」を実現しロサンゼルスの国際デザイン賞住宅部門を受賞。2010年、シラクサにモラーナ+ラオ・アルキテッティ事務所を設立。2012年にAIACの若手イタリア人建築家選抜でセリヌンテ賞佳作入選。2014年に「O邸」設計案がシチリア州主催設計競技「In/Arch-ANCCEシチリア」の40歳以下部門で第1等、「ノートのラルゴ・ポルタ・レアーレ」再開発計画でCNAPPC主催「2014年度イタリア建築若手才能」賞佳作入賞。2015年にANCSA主催「2015年度ゲッピオ賞」佳作、「2014年度イタリアン・プール賞」第1等、「2015年建築四分儀」賞の新建築部門に推薦。



夕景

「フローリスト・スタジオ」設計=小川晋一

支えるスラブ、それを覆うスラブ: すなわち住宅において排除できないもの マッシモ・フェッラーリ

参照 | 本誌pp.38-43

三重県の素晴らしい景観の基礎を形づくる岩石と土塊からなる土地に、不確かで演劇的なバランスを保ちながら、かろうじて建つ家。今回取り上げるこの住宅は、特異なフォルムによって、モダニティがしばしば競合しようとした風景との直接対決というテーマに切り込む。この建物は、われわれを浸すこの世界でどう生き延びるかという探求によって示された、創意工夫の技術的で建築的な証明に思われる。そこでは、われわれを守るのは屋内と屋外を隔てる1枚の透明な仕切りだけで、その取り囲む壁がすなわち住宅と定義される。ミース・ファン・デル・ローエ——ミースは自分が設計し実現した住宅において、このテーマおよび想定されるそのバリエーションを象徴的に解釈した——の仕事に始まり、例えばホセ・ルイ・セルト(ガラフの週末住宅、1935)、マルセル・プロイヤー(クラーク邸、1949)、ルイス・カーン(デヴォア邸、アドラー邸、1954-55)の設計を経由して、1949年のフィリップ・ジョンソンによるガラスの家に至るまで、このテーマは集合的想像力の中で豊かな根を張ってきた。また忘れてはならないのは、リチャード・ノイトラ、ジョン・ロートナー、ピエール・コニギッドなど20世紀のカリifornニア建築家たちの作品が示してきた事例であり、今日ではアルベルト・カンポ・バエザとエドゥアルド・ソウト・デ・モウラの探求が示すものである。この伝統は、2枚の水平スラブに挟まれたボリュームというかたちに翻案された。2枚のスラブが、本質まで無駄をそぎ落としたほとんど差異のないやり方で、地表からの離脱と空からの遮蔽——住まうという概念を、原初的な定義まで切り詰める状態であり条件——を決定する。上述した先例が証明するように、違いが見られるとすればそれは、単に建物の内部空間とファサードの関係に起因することがほとんどだ。より突出した雄弁な差異は、建物の外被を2枚の水平スラブに還元し、一方を他方の上に魔法のように浮遊させるという目標に従って、あらゆる支柱の存在を否定する試みから生まれたバリエーションである。ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ロー



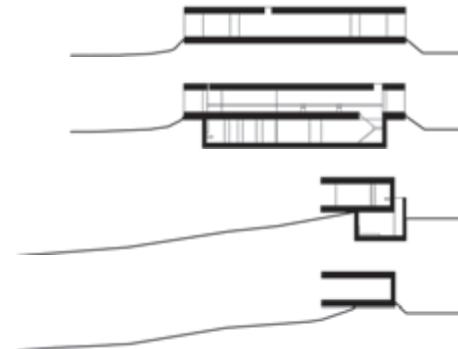
1階ギャラリー



地階の居住スペース



平面図



断面図

エの最も有名な設計案に、実現されなかったレザーラー³ [参照: 本誌 Fig.3]があるが、まさにこの方向を決定づけている。計画案に先立つスケッチでも、ミースはある風景写真を選んで細い構造柱で三分割し、生活空間の背景としている。

小川晋一の仕事は、現代の一世帯用住宅に付随する歴史に新たなピースを加えた。事実、彼の作品は、どの建物でも存在論的本質を表す2枚の水平スラブの間から垂直支柱の存在をすべて希薄化し、隠すのにより適した建物の可能性を見定めるため、長い省察の産物である。そこから派生したのが、「C」型の鉄骨構造の採用を巡る小川の研究と、教条主義的マニアとして自己演出しようとする彼の能力である。今回取り上げた作品の直前もしくは直後に建てられた住宅を一瞥すれば、それらが規模にバリエーションを加えた(例えば30、22、16m)連続的成果だと分かるが、すべては生活空間の内部に屋外環境の多様な造形を包含させる最終目的に収斂する。

住宅は鈴鹿山脈と向かい合い、住人であるフローリス

トが自ら造った庭園に囲まれている。施主はコレクターとしての情熱を傾けて、建築家が設計した多彩な空間の解釈を支持した。この三重に建てられた住宅は、生活空間の構成を通して構造のバランスを優美に見せつける。家の最もプライベートな部分——寝室、キッチン、水廻り——は地中にしっかりと打ち込まれ、細いスリットから採り入れた光を地下まで引き入れる。階段を中心として有効面積を2層に分ける空間デザインによって、接地面の技巧は隠される。正面ファサードを眺めると、家が敷地の起伏の上に軽やかに浮かぶよう見える。ヴォリュームの白いフレームの明快さは、自然風景と対照的に、途切れのない空間の演劇的な感覚を強調する。その一方、側壁のガラスからフレームをなくすことによって、内部と外部の距離をすべて無化した。ミニマリスト・ハウス(沖縄、2009)からレイクサイド・ハウス(山梨、2016)まで小川の他の作品と比べると、現在われわれが見ている「フローリスト・スタジオ」においても、小川晋一の仕事に今後も注目すべきであることが確認されよう。

作品: フローリスト・スタジオ

設計: 小川晋一/小川晋一都市建築設計事務所

規模: 敷地面積 1344.67m²/建築面積 138.97m²/延床面積 173.16m²

スケジュール: 設計 2012年/施工 2014年

所在地: 三重県三重郡菰野町

[小川晋一]

1955年、山口県生まれ。日本大学芸術学部で学び、1978年卒業。1977年、ワシントン州立大学に交換留学。1984年に日本政府から国外研修を継続する機会を与えられ(文化庁派遣芸術家在外研修員)、アメリカで研究を行う。ニューヨークで1984年にポール・ルドルフ事務所、1985年にアルキテクトニカ事務所で働いた後、1986年に小川晋一都市建築設計事務所を開設し、現在東京と広島にオフィスを構える。作品は国際的評価を受け、2003年に第19回ミラノトリエンナーレの日本館、1996年のUIA(国際建築家連合)第19回バルセロナ会議に参加。2014年にバルセロナの「SPAIN JAPAN YEAR 2014」に日本を代表する12人の建築家として出展、2001年の「ondon、4×4日本アヴァンギャルド」展に作品が展示された。



南より見る



東側ファサード

エドワルド・ソウト・デ・モウラ——再生、修復、再建

「サン・ロレンソ・ド・バロカル農地の再生」

設計=エドワルド・ソウト・デ・モウラ

偽装が常に嘘とはかぎらない マルコ・ムラツツアーニ

参照 | 本誌pp.52-67

サン・ロレンソ・ド・バロカルはアレンテージョ地方中部にあり、城塞都市モンサラスと巨大なアルケヴァ人工湖からわずか数kmの距離だ。容積250km³の貯水池は、ポルトガルとスペインのエストレマドゥーラ州との国境を流れるグアディアナ川にダムが建設された後、1995年から2002年に造られた。この居住地はブドウ、オリーブ、コルクが植えられた780haの農地の中にあり、バロカルという地名は、バロカイスと呼ばれる地表から自然に露出する花崗岩の岩塊に由来する。この地に古くから住み着いた人々はそうした岩石を選んで、彼らの巨石建造物とした。19世紀後半にモンサラス周辺の土地が分割され、農地利用が始まったのと関連して建設されたサン・ロレンソ・ド・バロカルは、アレンテージョ地方の典型的な「モンテ」として形成された。モンテとは小さな農村で、穀物・野菜・ワインの生産、狩猟、畜産を営むことで、この地に年間通して住み着くようになった一定数の家族(多い時で約50世帯)の暮らしを支えている——礼拝堂、パン焼き釜、小さな闘牛場があることから、その定住性が確認できる。20世紀末に放棄されたバロカルの農地は、ゆるやかに観光地に変容するための数段階に分かれた再開発計画に基づいて、21



1階平面図



2階平面図

世紀初頭に再生された。その第1弾が、「カサス・ド・モンテ(モンテ住宅群)」の建物をホテルにコンバージョンする計画で、設備としてウェルネス・センター、レストラン、ワイン醸造用のワインセラーが備えられた。

2008年から2016年にかけてエドワルド・ソウト・デ・モウラが設計し実現した——内装家具を除いて——この再生計画には、成果を越えた关心が内包されている。そこで、歴史遺産という概念、つまりわれわれが付与しそうあるべきと考える価値そのものに、歴史建造物の具体的な保存を可能にする行動を与えるべく、一連の問い合わせかけられた。ソウト・デ・モウラの経験では、どんな歴史的価値が認められる建物でも、それを形づくった時間による変化を避けることはできない。反対に、建物は生き続け、使われ続けなければならない。「なぜなら日々の暮らしだけが建物を何か自然なものに変えて、遺産の地位

を与えるのだから」。この変化する性質をめぐる証言となったのが、ソウト・デ・モウラの近作の中でもポルト・アレグレの旧ロビンソン工場のコンバージョン、タヴィラのベルナルダス修道院の再生、サント・ティルソのアバテ・ペドローサ市立博物館である(それぞれ『CASABELLA』798号[2011]、817号[2012]、865号[2016]に掲載)。相異なる建築的介入であるが——なぜなら「すべてのケースは唯一無二」だから——、ノスタルジーに回収されずに過去を検証する力を共有し、あらゆる再生事業を批判的解釈を事前に実践した成果と捉える傾向がある。このように、バロカルの「モンテ」の場合も、周囲を取り巻く「広大で強烈な土地」のあふれるばかりの魅惑をはじめ、今なお多くの特異性が認められる。明らかな特質と言えるのは集落の都市的性格である。明確なヒエラルキーを備えた一種のミニチュア宇宙で、中央を走る道路——ルア・ド・モンテ——、そ



北東より見る



敷地中央を走る道路